

言語における否定的テーゼについて

三笠 俊哉^a

^a 湘北短期大学情報メディア学科

【抄録】

現代のコミュニケーション理論においては、言葉の意味をコミュニケーションが生成する、とみなす立場が強くなっている。この言語観の背景にあるのは意味への懐疑である。現代の言語哲学はこの意味への懐疑を意味の理論に内在した議論から導き出す。これがクワインやデイヴィドソンなどによる言語についての否定的テーゼである。本稿ではその否定的テーゼが導き出される背景を検討する。

【キーワード】

根底的翻訳 翻訳の不確定性 寛容の原理

1. はじめに

「人と人が何らかの合意にいたろうとして話し合ったり、ともに行動したりする」ⁱ活動としてのコミュニケーションは人間の言語活動のひとつの主要な側面である。近年における、コミュニケーション研究の理論面や実践面での隆盛は、その背後にある傾向を見ることができる。その傾向とは「コミュニケーションが先に存在して、その結果として言葉（の意味）が生成される」ⁱⁱという言語観である。こうした言語観は、言葉の意味という概念へのある種の懐疑を含意する。なぜなら、言葉に対するコミュニケーションの優位とは、唯一に確定した言葉の意味という概念を拒否する。しかし、言葉の意味が確定しているという意味の実在論的見解は西洋哲学において長らく主流であっ

た見方であり、コミュニケーション優位の主張はこの伝統的な意味概念への決別であるからである。

本稿の課題は、こうした意味への懐疑的態度の源流のひとつと思われる言語哲学における否定的テーゼが提出された事情を概観することである。まず、クワインによって提出された翻訳の不確定性テーゼを検討し、次いでクワインから大きな影響を受けながらも、その見解を批判的に発展させたデイヴィドソンによる根底的翻訳の議論を検討することにする。

2. 翻訳の不確定性と根底的翻訳

翻訳の不確定性は、20世紀アメリカの哲学者 W.V. クワインが1960年に出版された主著『ことばと対象』（以下WOと略記する）で提出したテーゼである。これは次のように定式化される。

ある言語を別の言語に翻訳するための手引き

<連絡先>

三笠 俊哉 mik3@nifty.com

には、諸々の異なる手引きが可能であり、いずれの手引きも言語性向全体とは両立しうるものの、それら手引きどうしは互いに両立しえないということがありうる。([OW], § 7)

このテーゼの含意するところは次のようなことである。一般に、翻訳とはある言語に属する文を、なんらかのマニュアルにしたがって別の言語に属する文に対応させるような試みである。たとえば、日本語から英語への翻訳の場合、それぞれの言語の文法をもとにした翻訳マニュアルを作成することができるだろう。その際、複数の翻訳マニュアルが存在し、それらがある日本語の文をマニュアルにしたがって翻訳したときに、正しい翻訳であるように見えるものの互いに両立しえないような翻訳をすることがありうる、というのがクワインの主張である。

これは、「手が痛い」という日本語の文を英語に翻訳するとき、“I feel pain in my hand”と訳すべきだとするマニュアルと“I have a pain in my hand”と訳すべきだとするマニュアルがありうる、すなわち同じ意味になる表現が複数あるということを言いたいわけではない。一つのことを表すのに複数の表現がありうるというのは外国語学習者にとってやっかいな事態であるのはたしかだが、翻訳の不確定性テーゼは単に外国語習得において、学習者が直面するであろう一般的困難を言語哲学の道具立てで言い換えたものではないのである。

では翻訳の不確定性テーゼの内容とはどのようなものなのだろうか。それを理解するには、クワイン自身が提出した「根底的翻訳 (radical translation)」という思考実験を考えるのがわかりやすいⁱⁱⁱ。以下、クワインの議論に沿って、これを見ていくことにしよう。

これまで知られていなかったような言語を調査し翻訳しようとするフィールド言語学者がいたと

しよう。言語学者が作業を進めるにあたって、今まで身に着けた外国語についての知識は役に立たないだろう。なぜなら、このとき接する現地人が話す言語はまったく未知のものであり、既知のいずれかの言語と類縁関係にあるかどうかもわからないからである。したがって、翻訳の基礎データとなるのは、五感など現地人の感覚器官への外界からの働きかけである刺激と、それに対する現地人の振る舞いである。

外界からの刺激を用いた翻訳とは次のように行われる。最初に翻訳されるのは、言語学者と現地人の両者の眼前にあるような出来事に関する発話である。例えば、一匹のうさぎが目の前を走り抜けたとき、それを見た現地人が「ガヴァガイ」と言ったとする。このような文のことを場面文と呼ぶ。言語学者はひとまずこの場面文を「うさぎだ」という意味だと理解し書き留める。その後、言語学者は別の機会にも同様にうさぎが目の前を走り抜けたときや、あるいはうさぎがまったくいないときや、その他さまざまなケースに「ガヴァガイ？」と発音してみて現地人の反応をうかがい、同意を示しているのか不同意を示しているのかを調べていく。言語学者にできることは、観察を手がかりとして現地人の言語の文法を推測し、さらにその推測がどの程度あたっているかをみることだけなので、これをくり返して「ガヴァガイ」を「うさぎだ」と訳すことを正当化するような帰納的証拠を蓄えるのである。これらの帰納的証拠によって正当化されるのは、「ガヴァガイ？」という文によって同意されるような刺激と、「うさぎですか？」によって同意されるような刺激が同じである、ということである。このような作業をさまざまな現地人の発話について行い、それにどのような翻訳が対応するかの証拠を集めてゆけば、これらの証拠を基にして現地語から日本語への翻訳マニュアルを作成することができるだろう。

ところが、このような方法では複数の翻訳マニュアルが作成可能である。というのも、場面文「ガヴァガイ」と「うさぎだ」の刺激への反応が同じであったからといって、これらを構成する語の外延が同じだということにはならないからである。言語学者は「ガヴァガイ」の翻訳を「うさぎだ」としたが、これを「うさぎ性だ」とか「あるうさぎの短時間の諸断片だ」と翻訳してもコミュニケーションに支障が生じないどころか、現地人の同意／不同意のふるまひの上ではまったく区別がつかない可能性が考えられる。その場合、「うさぎ性だ」と翻訳するようなマニュアルは「うさぎだ」と翻訳するようなマニュアルとは異なったものであるはずである。では、どちらの翻訳マニュアルを用いてもコミュニケーションに支障がないなら、どちらをつかってよいのかというところではない。次のような場合が考えられるからである。上のような関係にある二つの翻訳マニュアルA, Bがあったとしよう。Aは「ガヴァガイ」という発話を「うさぎだ」という日本語の文に翻訳し、Bは「うさぎ性だ」という文に翻訳する。最初、Aを用いて「ガヴァガイ」を日本語「うさぎだ」に翻訳する。「うさぎだ」の真理値が真ならば、「ガヴァガイ」の真理値も真とみなす。また、「うさぎ性だ」は偽となる。だが、ここで翻訳マニュアルBを併用したとする。すると「うさぎ性だ」が「ガヴァガイ」に翻訳されるので、真でありかつ偽であることになり、矛盾となってしまう。つまり、二つの翻訳マニュアルを混ぜて使うことはできないのである。

ふたつの翻訳マニュアルA, Bが存在したとしても、翻訳の正しさの基準を厳密に定め、翻訳した文の数を増やしてゆけばそのうちA, Bの間に優劣をつけられるのではないかと考えたくなるかもしれない。しかしクワインの主張はこのような可能性を認めない^{iv}。言語学者による翻訳マ

ニュアル作りの過程で作られる仮説をクワインは分析仮説と呼んでいる。この分析仮説は、さまざまな場面文や論理語を含んで構成されているような複合文を、繰り返し出てくる適度に短い部分に分割し、それに日本語の対応する語を割り当てたものである。この分析仮説が最終的には一意に決まるというのであれば、翻訳マニュアルもまた一つに決まるかもしれない。しかし、実際にはそんなことにはならない。それは、クワインが考える翻訳が正しいための条件が、「話者との言語性向全体の一致」というところにあるからである。「言語的性向全体の一致」とは、文への同意／不同意の反応が大体において一致すること、換言すれば話者の間でコミュニケーションが円滑にいくことである^v。「ガヴァガイ」の例からもわかるように、このようなこの条件を満たすような翻訳は複数あり得る。そして、そのような翻訳はそれぞれが正しい翻訳であるのだから、翻訳マニュアルも一意には決まらない。それも、原理的に決まらないのである。クワインが翻訳の不確定性テーゼで強調したポイントもここにある。翻訳マニュアルの優劣を決めるような事態などというものはそもそも存在しないのである^{vi}。

3. 意味への懐疑

上記のような翻訳の不確定性からクワインが引き出した帰結は何だったのだろうか。それは「意味」という概念への懐疑である。

場面文の翻訳を思い出してみよう。場面文の翻訳は外界からの刺激を参照して行われるのであった。その場合でも、結局翻訳の正しさを判定する規準がコミュニケーションの円滑さといったようなものであれば、翻訳をひとつに確定することはできなかった。分析仮説の場合には、外部からの刺激という一応参照すべきもの、いわば「その

真偽を問うべき客観的事実」すらないのである^{vii}。このような不確定性からの帰結は、しばしば人間の認識能力の不完全性と混同されがちである。クワインは、このように翻訳の不確定性の要点をつかみ損なう原因のひとつとして、「真の二か国語話者」という例をあげている。仮に、完璧なバイリンガルがいたとしよう。その人は、母国語と外国語の区別なく二つの言語、日本語と英語を操ることができるとする。そのような人なら、二つの言語の間に文単位で唯一の正しい対応をつけることができ、この人にとっては翻訳は確定しているといえるのではないか。クワインによれば、このような考えは誤りである。このように考えたいくなる背景には、文の同一性は人間の頭のなかで、文の内容を表している表象を比べることによって判定することができる、という概念がある。そして、この頭のなかにある文の内容を表す表象とは、通常、意味といわれているものであろう。しかし、クワインはこのように文の意味を心的な表象とみなす考えを批判している。というのも、もし意味が心的な表象であるとしたら、それは個人の心のなかにあるのであり、他人の表象と自分の表象を比べることはできないはずである。つまり言葉の意味というのは、それが伝達可能である限り、単に心のなかの表象ではありえないのである。

クワインによる意味という概念への懐疑をまとめると以下のようなになる。中立で普遍的な言語の意味は、外部世界にはない。なぜなら、「ガヴァガイ」を「うさぎだ」とするか「うさぎ性だ」とするかは原理的に決めることができず、このことはコミュニケーションが成功しているか否かという翻訳の成否には関係がない。また中立で普遍的な言語の意味は人間の頭のなかにもない。というのも、もし意味が頭の中の表象であるのなら、それは私的なものであり他人との意思疎通のための道具にはならないのである。

4. 寛容の原理

さて、前節でみた翻訳の不確定性とそこから帰結する意味への懐疑を受け入れたとして、これらを受け入れることで日常的な言語使用の理解になにか影響を及ぼさないのだろうか。つまり、意味という概念が疑わしいのならば、言語使用の実践の場でコミュニケーションが成り立っているということはどのように理解すればよいのだろうか、という疑問がわくのである。

根底的翻訳のような極端なシチュエーションは実際にはないかもしれないが、もし翻訳の不確定性を受け入れるのなら次のような事態が発生してもおかしくないように思える^{viii}。古代ギリシャ語で物質の最小単位のことを「アトモス (atomos)」という。これは英語の“atom”の語源となっていることばである。現代物理学を知らず、また古代ギリシャ語しかわからないデモクリトス主義者と物理学者が、物質の最小単位についてディスカッションをするとしよう。このとき、デモクリトス主義者は古代ギリシャ語—日本語の翻訳マニュアルAだけを所持しており、物理学者は日本語—古代ギリシャ語の翻訳マニュアルBを所持している。そして、A、Bはともに言語性向に合致した翻訳をするマニュアルである。Aでは「アトモス」は「原子」と訳すことになっており、Bでは「素粒子」と訳すことになっている。彼らの会話の中で物質の最小単位についての話題が出てきたとき、デモクリトス主義者が「アトモス」という語を含む文S1(アトモス)というを使ったとしよう。この文はマニュアルAを用いてSA1という文に翻訳される。このときSA1には「アトモス」にあたる場所に「原子」という語が充てられている。次に物理学者はSA1に対しての答えの文S2を考え、これをBを使ってSB2に翻訳してデモクリトス主義者への答えとする。果たして、このときコ

コミュニケーションは成立するだろうか。

おそらく、このような状況では次のようなことが起こるのではないと思われる。S2には(原子)という言葉が含まれているが、これをBで翻訳するとこの語は「アトモス」にはならない。デモクリトス主義者が受け取る文SB2には、S2にあった「原子」の訳語として「アトモス」以外の語がつかわれている。そして、その語はデモクリトス主義者にとっては物質の最小単位を表す語ではない。そして、Bで「原子」が一体どのような古代ギリシャ語の単語に翻訳されるのかはわからない。

この状況をもって、コミュニケーションが成立していないと考えることも可能かもしれない。しかし、実際にはこの状況であったとしても理解不可能なほど翻訳が異なるわけではないのではないだろう。上の例では「アトモス」となっているべきところに、既知の語であるが「アトモス」とは異なる語がつかわれている文が返答として返ってくる。このように文の中で、たかだか一つあるいは一部分について話者の意図とは異なる語がつかわれていたとしても、前後の文脈からデモクリトス主義者は「アトモス」であるべきところを「アトモス」で置き換えることが可能な場合が多いのではないかと思えるのである。このように、誤訳とも思えるようなことが起こったとしても、それを訂正するように働く力とはいったい何なのだろうか。アメリカの哲学者デイヴィドソンはこのような力を「寛容の原理 (principle of charity)」として定式化した。

デイヴィドソンは、クワインの翻訳の不確定性の議論を踏まえたくて、さらに未知の言語を意味論的に解釈するための理論を非意味論的な発話行為に基づかせることができるかを問うた。それが根底的解釈という思考実験である。根底的翻訳のときと同じように言語学者と未知の言語を話す人々を例にとろう。デイヴィドソンによれば、文

を理解するためには、それを解釈するための理論、すなわち個々の文に意味を与えるようなものがないければならない。解釈とは一種の再記述である^{ix}。そこで「ガヴァガイ」という発話がなされたときうさぎがいたなら、「『ガヴァガイ』が真であるのは、うさぎがいるときかつそのときに限る」という解釈を与える文(通称T-文)を考える。

このT-文とは、論理学者タルスキが形式言語の意味論を与えたとき用いたものである。タルスキは、形式言語において「真である」という述語を定義するために、有限の公理から再帰的に「sが真であるのは、pのときかつそのときに限る」という無限個の定理を導出できることを示した^x。この's'は表現の記述で、pはsの翻訳である。デイヴィドソンは、タルスキの定理を用いて、話し手がどのような条件のもとでいかなる文を真とみなすかを示したのである^{xi}。この作業を行うにあたって、言語学者は話者の信念を固定する。信念を固定するとは、「現地語の話し手が正しいことになるような真理条件を、それが可能と認められる場合には、この異国語の文に割り当てる」^{xii}、すなわち相手が正しいと思えるような解釈あるいは翻訳をせよ、ということである。これを寛容の原理という。この原理が必要なのは、解釈の場合であれ翻訳の場合であれ、言語学者は現地人の信念について正確な知識を持っていないが、信念を知るには相手の文の意味が分からなければならないし、他方で文の意味がわかるためには相手の信念がわからなければならないという困難を回避するためである。

実は、この寛容の原理はデイヴィドソンのオリジナルというわけではない。クワインはすでにWOにおいて、「または」「ならば」といった論理結合子の翻訳について、「対話者がある程度愚かであっても、悪しき翻訳を許すほど愚かではありそうにない、という常識がある」と、この原理を

先取りするような仮定を置いている^{xiii}。では、寛容の原理についてのデイヴィドソンの論点はどこにあるのかということ、寛容の原理を言語一般にまで拡張することで、言語学者は自分にとって理解可能なマニュアルを作ろうとし、その際多くのものが話者と自分の間で共有されている。そして、そうであるがゆえに、翻訳マニュアルの複数性という意味での不確定性があったとしても、そこからコミュニケーション不全が帰結するわけではないのである。

5. まとめ

以上の議論を簡単にまとめると次のようになる。根底的翻訳という思考実験によって、言語の翻訳には本質的に不確定な要素があるということ示される。それは言語の翻訳が不可能ということではなく、翻訳の成否の規準をコミュニケーションがうまくいくか否かという言語性向の一致というところにおくならば、翻訳ルールは複数存在し、しかもそれらが論理的に両立しないことがあり得るということである。この主張はクワインのとした前提を受け入れるならば正しい。しかし、これを受け入れることは、即言語によるコミュニケーションの不完全性を含意するわけではない。デイヴィドソンは、言語において不確定性の議論が成立することは認めたくえで、それでも言語使用において理解不可能なほど翻訳が異なることはないと指摘した。そして根底的解釈の思考実験でデイヴィドソンは実際の言語使用における寛容の原理の重要性を指摘した。

本稿で主に検討した翻訳の不確定性とそれにまつわる議論は、実は本稿ではその全体を検討しなかったが、クワインによるロジカル・ネガティヴズム（論理的否定主義）の諸テーゼのひとつである。クワインのこのテーゼにより、言語哲学は言

語の静的な構造分析から、言語行為あるいは言語が用いられる社会的文脈全体を考慮にいれた分析へとシフトしていった。この傾向はクワインにやや先行するL.Wittgensteinの哲学にも同様の視点を見ることができ^{xiv}。こうした、言語哲学における成果は、言語の限界について外的な視点からなされたわけではなく、言語についての静的な考察を緻密に積み上げていった結果導き出されたものであるがゆえに価値があるのである。

〈参考文献〉

- Davidson, D., 1984, *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford U.P., (野本和幸, 植木哲也, 金子洋之, 高橋要 訳, 1991, 『真理と解釈』, 勁草書房)
- Kirk, R., 1986, *Translation Determined*, Clarendon Press.
- Quine, W. V. O., *Word and Object*, The M.I.T. Press, 1960. (大出晃・宮館恵 訳, 1984, 『ことばと対象』, 勁草書房)
- Evnine, S., 1996, 『デイヴィドソン 行為と自由の哲学』, 宮島昭二 訳, 勁草書房
- 坂本百大 編, 1987, 『現代哲学基本論文集 II』, 勁草書房.
- 高田明典, 2011, 『現代思想のコミュニケーション的転回』, 筑摩書房.
- 富田恭彦, 2007, 『アメリカ言語哲学入門』, 筑摩書房.
- 中村正利, 1999, 「意味と指示の懐疑論」, 博士論文, 筑波大学.
- 野家啓一, 1993, 『科学の解釈学』, 新曜社
- 森本浩一, 2004, 『デイヴィドソン 言語なんて存在するのだろうか』, NHK 出版

〈注〉

- i 高田 (2011) , p.9
- ii 高田 (2011) , op. cit, p.49
- iii Quine (1960) , § 7.
- iv Quine (1960) , § § 15-16.
- v Quine (1960) , § 9.
- vi 翻訳の不確定性の本質が存在論的なものであるという議論は中村 (1999) , pp.9-11, に多くを負っている。
- vii Quine (1960) , § 16.
- viii 以下の議論は, 丹治 (1997) pp.146-150, を参考にした。
- ix Davidson, 1984, p.141.
- x タルスキによる真理定義の詳細については坂本 (1987) に収録されている A. Tarski, 「真理の意味論的観点と意味論の基礎」を参照。
- xi Davidson (1989) , pp.130-131. Eynine, 1991. 220 頁.
- xii Davidson (1984) , p.137.
- xiii Quine (1960) , § 13.
- xiv クワイン自身も WO で自分の主張と Wittgenstein の類比を指摘している。野家, 1993 参照。

On the thesis of negativism in language

MIKASA Toshiya

【abstract】

Some communication researcher claim that communication theory precedes to theory of meaning. Their argument is supported by the famous thesis of today's philosophy of language, the thesis of indeterminacy of translation. According to this thesis, there will be some different ways to translate language, and they are equally correct but conflict each other. Davidson points out that at the case of radical interpretation there will be indertmination in same way, and linguistist who translate of interpret another language will make the manual for translation in which he can understand the sentense to the maximum.

【key words】

radical interpretation, indeterminacy of translation, principle of charity